プラマーナ・ミーマーンサーの研究

——著作年代を中心にして——

長崎法潤

一

Pramāṇamīmāṁsā（Pm.）はジャイナ論理学書の中でも最も重要なるものの一つと考えられ、十二世紀に西インドにおいてジャイナ教学者として最有力と目され、Kalikālasarvajña（カーリ時代の一切智者）なる称号を有するHemacandra（1088—1171 A. D.）学匠[1]の著書である。後期ジャイナ論書の特徴として、Pm.においても、正理、勝論、ミーマーンサー、ヴェーダーンタ、仏教等の説や引用が豊富に含まれている点において、各学派間の影響、交渉及びそれの時代的、思想的背景を窺うことが出来る興味深い問題を我々に提供しているが、その問題の考究は後の機会にゆずり、まずその論理書をめぐる若干の問題点を究明しておく必要がある。

Pm.は重要な論理学書であるが、残念にも未完の著書として伝えられている。この論理書の初めの部分において、五編云々から成る論書を書くという作者の意志が示されているが、現存するすべてのマニュスクリプトは第二編の途中で未完のまま終っている。この未完であるという理由から、従来、Pm.はヘーマチャンドラの絶筆ではなかろうかと漠然と言われてきた。[2] ただ単に未完である事実から絶筆であると結論するには無理がある。完成されたものが完全のままで伝承されない場合もありうるし、必ずしも作者の死去ではなく、種々の事情がその完成を妨げたとも考えら

れる。それ故、この小論において、この論理書がヘーマチャンドラの絶筆であるか否かという点に焦点を絞り、それの証明に資する出来うる限りの資料について検討を加えてみたい。この場合困難なことは、その証明に必要な資料は何一つとして他の記録に見出せないことである。従って、この論理学書の構成及び内容について検討するのが最初の問題であり、その過程において関係のある色々の点が浮びあがってくると思われる。しかる後にそれらを総合して結論を導き出したい。

二

Pm. の冒頭において、この論理学書の形式について語られている。ジャイナ教説をまとめた sūtra[3]——ここにおいて採用されている——は、時代々々において教説が短縮されたり、敷衍されたりされて著される略辞的文体の形式にして、Umāsvāti（五～六世紀、白衣派）の Tattvārthasūtra の場合もそうであると記している。それに続き、Pm. I. 1. 2[4]において次の如く記されている。

「（問）、Akalaṅka, Dharmakīrti 等の如く、何故に prakaraṇa（論）を著さないのであるか。何故に sūtrakāra（スートラの作者）であることを言いふらすのであるか。（答）、そのように言うべきではない。なぜならば、この作者（Pm. の作者）[5]は自分の好みに応じ、世間（の意見）も、王の命令も（この論理学書を書くにあたって）作者の自由意志を抑えてはおらない。汝の考えは浅薄である。」

ここに言及されている Dharmakīrti すなわち法称は仏教論理学の大成者であり、ヘーマチャンドラに対して非常に大きな影響を与えている。まずその点で注目すべきは、法称の論理学書からの引用が数多く Pm. に見出されることである。現在までに identify されているものだけ記せば、Nyāyabindu から二回[6]、Hetubindu より二回[7]、Vādanyāya より二回[8]、Pramāṇavārttika より九回[9]引用されている。このことは実に法称が代表的仏教論理学者としてヘーマチャンドラによって注目されたばかりでなく、大きな影響を与えたことを示している。[10]法称と並んで言及されている Akalaṅka すなわち Akalaṅka Deva（720～780？）は、種々の点でジャイナ論理学の基礎づけに貢献[11]せる Digambara の学僧である。彼の Laghīyastrayī と Siddhiviniścaya からそれぞれ二回[12] Pm. において引用され、彼の説が認められていることより、彼はジャイナの論理学者として、仏教論理学者の法称と並び、ヘーマチャンドラに尊敬されて

いたことがわかる。

ところが、ヘーマチャンドラは Pm. の執筆において、彼の認識論と論理学とに大なる影響を与えた Akalaṅka や Dharmakīrti の用いる prakaraṇa（論）形式には従わず、自分の意志によってスートラ形式を採用した、と記している。このスートラ形式とは「本来、聖句読誦・祭式執行の正確に資すべく、ヴェーダ祭祀主義の内部に生れた補助学 Vedāṅga に固有な、極度の略辞的文体を以て述べられる定式、乃至はその様な定式から成り立つ文献、の謂いである。」[18] その文体は古典期に属する基本テクストに踏襲され、後代にもその例が見出される。Pm. I. 1. 1 によれば、Pāṇini, Piṅgala, Kaṇāda, Akṣapāda 等は sūtrakāra であると言う。ジャイナ教の側においても先述せる Umāsvāti の Tattvārthasūtra において採用されている。それ故、ヘーマチャンドラはそれら婆羅門教及びジャイナ教学者の用いる形式を採用して Pm. を書いたと考えられる。この形式の問題は次に考察する構成にも深く関係して理解されるであろう。

形式についての説明が終ると、次にこの論理学書の構成について Pm. I. 1. 3 において記されているが、参考のため原文を引用すれば次の如くである。

Tatra varṇasamūhātmakaiḥ padaiḥ, padasamūhātmakaiḥ sūtraiḥ, sūtrasamūhātmakaiḥ prakaraṇaiḥ, prakaraṇasamūhātmakaiḥ āhnikaiḥ, āhnikasamūhātmakaiḥ pañcabhiradhyāyaiḥ śāstrametadaracayadācāryaḥ.

（そこで、アーチャールヤはこの論書を五編に分けた。各の編は幾かの章によって構成され、それらは更に幾かの論に分かれる。各の論は幾かのスートラによって構成され、各のスートラは幾かの単語より成り、単語はまた音節から構成されている。）

ここで Pm. の構成と比較して興味深いことは、まず Vātsyāyana による Nyāyabhāṣya（ニャーヤ・スートラ註解書）は五編（adhyāya）に分かれ、各編はそれぞれ二章（āhnika）から成っているということである。更に、Nyāyabhāṣya に対して著された Uddyotakara（六世紀後半）の評釈書、Nyāyavārttika において、Pm. の場合と殆んど同じ記述をもって、その構成について次の如く記されていることが注意せしめられる。

Śāstraṁ punaḥ pramāṇādivācakapadasamūho vyūhaviśiṣṭaḥ, padaṁ punarvarṇasamūhaḥ, padasamūhaḥ sūtram, sūtrasamūhaḥ prakaraṇam, prakaraṇasamūha āhnikam, āhnikasamūho 'adhyāyaḥ, pañcādhyāyī śās-

tram.[14]（しかるにシャーストラは量等の文章によって構成されている。幾かの音節が集って単語が成り、単語が集ってスートラが作られ、スートラが集って論が構成され、幾かの論が集って章が成り、幾かの章が集って幾かの編が構成され、このシャーストラは五編より成っている。）

かくして Nyāyavārttika は五編（adhyāya）に分かれ、各編は二章（āhnika）に分けられている。ところで、音節（varṇa）⟶単語（pada）⟶スートラ（sūtra）⟶論（prakaraṇa）⟶章（āhnika）⟶五編（adhyāya）⟶シャーストラ、という構成の点で Nyāyavārttika と Pm. とが全く一致せる構成方法を採用している。これは単なる偶然の一致ではなく、明らかにヘーマチャンドラが Pm. を著すに際し、ニャーヤ学派の論書に目を通し、Nyāyavārttika の構成方法をそのまま模倣したものとしか考えられない。Akṣapāda の Nyāyasūtra が十六回[15]、Vātsyāyana の Nyāyabhāṣya が二回[16]、Uddyotakara の Nyāyavārttika が一回[17] Pm. に引用されていることもヘーマチャンドラが持っていたニャーヤ学派に対する関心を窺わせるに充分であるし、Pm. の構成を Nyāyavārttika のそれに倣ったと考えても間違ってはいないだろう。

以上の考察によりて次の如く結論してもよいであろう。ヘーマチャンドラは Pm. を著すにおいて、思想的に大なる影響を与えた法称等の prakaraṇa 形式によらず、正理学派等が本来用いており、ジャイナ教の側では Umāsvāti によって採用されたスートラ形式を取入れた。それと関係する構成の面では、ニャーヤ・スートラの注釈書等、特に Nyāyavārttika の方法をそのまま採用している。若しスートラ形式を特にニャーヤ・スートラの註釈書等から採用したと考えれば、Pm. の形式と構成とは一致して正理学派の影響のもとにあると見ることが出来る。

三

前述せるように、Pm. の初めの部分において五編云々なる論理学書を著すという意志表示がなされているが、現存せるものは第二編の途中で未完のまま終っている。そこで第一編は二章に分けられ、そのうち第一章には四二スートラ、第二章には二三スートラが含まれている。ところが第二編、第一章、第三十五スートラを釈する箇所において、負処（nigrahasthāna）に対する仏教論理学の主張を破し、次に信書による論議の定義を提起しようとして筆が止絶えている。その最後の文章を原文から示せば左の如くである。

Ayaṁ ca prāguktaścaturaṅgo vādaḥ kadācitpatrālambanamapyapekṣate 'tastallakṣaṇamatrāvaśyābhidhātavyaṁ yato nāvijñātasvarūpasyāsyāvalambanaṁ jayāya prabhavati na cāvijñātasvarūpaṁ parapatraṁ bhettuṁ śakyamityāha——.[18] 〔前述せる四要素[19]による論議は、ある時は文章（の媒介）によって行われる。それ故その定義がここにおいて必ず説かるべきである。所以は、それ（論議の媒介物）の自性を知らずして、それに依ることは（論議の）勝利の為に資しないし、その自性を知らずには他（から送られた）書状（の内容）を見破ることが不可能であるからである。それ故次に（軌範師は）説いている——。〕

この引用文の最後が示すように、次に信書による論議に関説せる第三十六スートラを掲げることが明らかである。つまり文章の内容からしてもこれは未完であることが明瞭である。

Nyāyabhāṣya と Nyāyavārttika とは五編から成り、各編が二章に分けられていることについて既に記した。それらの構成方法を採用した Pm. においても、偶然かも知れないが現存せる第一編は二章に分けられている。そこで、ヘーマチャンドラが Nyāyavārtika 等のように全五編の各編を二章に分けた論理学書を著したと仮定するならば、現存する Pm. は第二編、第一章の途中で終っているから、ヘーマチャンドラが構想せる構成の三分の一にもならないことになる。原型の三分の一より少い部分しか現存しておらないとなれば、内容の点から見れば問題にならないほど不完全なものと考えられる。そこで Pm. が取扱っている内容も一つの論理学書という観点からすれば、三分の一にも満たないものであろうかということを検討する必要がある。この書がヘーマチャンドラの絶筆であるか否かを決めるためには、内容の研究をなすことが重要な鍵を握っているように思われる。内容の詳細な研究は稿を改めて発表することにして、ここではその概観だけで当面の問題を考察するのに充分であろう。

第一編

第一章

帰敬偈

この論書の形式及び構成。

pramāṇa と mīmāṁsā の意味。

量の一般的定義。

決定（nirṇaya）の定義。

疑惑（saṃśaya）、不決断（anadhyavasāya）、顚倒（viparyaya）の定義。
量の妥当性（prāmāṇya）は自立的か他立的かの問題。
正理学派と仏教との量の定義に対する批判。
各学派の認める量の数について。
ジャイナ教の認める二種の量、pratyakṣa（直接的智）と parokṣa（間接的智）の確立。
他派の認める量に対する批判。
直接智の定義。
直接智の二重性——勝義的と世俗的。
勝義的直接智の種類。
世俗的智の検討（indriya, manas, avagraha, īha, avāya, dhāraṇa）。
他派によって認められる直接智の定義及びそれらに対する批判。
量の対境、果、量者をめぐる種々の問題。

第二章
間接智の定義。
間接智の種類（smṛti, pratyabhijñāna, ūha, anumāna, āgama）。
遍充（vyāpti）について。
比量の定義。
自の為めの比量（svārthānumāna）と他の為めの比量（parārthānumāna）。
仏教の説く因の三相と正理学派の五相との説明と批判。
ジャイナ教の立場における因の五相の確立。
思択（tarka）について。
所立（sādhya）あるいは宗（pakṣa）の定義。
現量、比量、聖教、人々の意見、ある人自身の陳述、言語的習慣における矛盾について。
有法（dharmin）の定義。
喩（dṛṣṭānta）は比量において必要か否かの問題。
同法（sādharmya）と異法（vaidharmya）との定義。

第二編
第一章
他の為めの比量（parārthānumāna）の定義。
論証の可能と不可能とによって仮に二種とす。
論証形式について。
五支の確立。
仏教に対する論駁。

五支の定義及び説明。
似因 (ābhāsa) について。
不成 (asiddha)、相違 (viruddha)、不定 (anaikāntika) の定義と種類。
似喩の十六種 (同法—八、異法—八)。
論破 (dūṣaṇa) の定義。
誤難 (jāti) の定義。
誤難の二十四種の分類について。
詭弁 (chala) の定義とその三種——vākchala (言語上の詭弁)、sāmānyacchala (一般化の詭弁)、upacāracchala (仮説の詭弁) ——について。
論議 (vāda) の定義。
論諍 (jalpa) について。
論詰 (vitaṇḍā) について。
勝利 (jaya) と敗北 (parājaya) との定義。
負処 (nigrahasthāna) の定義。
正理学派の負処の引用。
二十四種の負処 (正理学派) の説明及び論駁。
仏教の負処及びその批判。
信書による論議の提起。

インドでは論理学は必ず認識論と結合し、知識論として考究されることは周知の如くである。そこで論理学書において、まず最初に認識一般を問題として提起し、認識作用の基本としての直観を論じ、次に思惟、次に判断、続いて推理形式とその諸条件、最後に論証方法とその誤謬を論ずることになっている。右に示されたPm.の内容をこの形式に当はめてみれば、第一編、第一章において量 (pramāṇa 認識手段) 一般に関する問題を出し、次に現量 (pratyakṣa 直接智) について論ずる。第二章に入り思惟そして判断を扱う為自比量 (svārthānumāna) が論ぜられ、次に推理形式を成立させる諸条件について語られる。第二編、第一章では為他比量 (parārthānumāna) がまず問題にされ、そこにおいて論証形式が語られ、次にその誤謬が示されている。

Pm.の論理学は勿論正理学派のそれと同じ性格のものではないが、その書を著すにおいて、形式及び構成の面で直接のヒントを与えたニャーヤ関係の論書の内容と若干の比較を試みることも無駄ではない。

ニャーヤ学派の根幹をなすものは正理経の劈頭に記されている十六諦であり、それは第一編及び第五編において論じられている。比較的後世の成立[20]と言われる第二、第三、第四編には十六諦が敷衍されている部分もあるが、第一、

第五編の内容に比すれば第二次的のものである。そこでその十六諦とは、(1)量（pramāṇa）、(2)所量（prameya）、(3)疑惑（saṃśaya）、(4)動機（prayojana）、(5)基準（dṛṣṭānta）、(6)定説（siddhānta）、(7)支分（avayava）、(8)思択（tarka）、(9)決定（nirṇaya）、(10)論議（vāda）、(11)論諍（jalpa）、(12)論詰（vitaṇḍā）、(13)似因（hetvābhāsa）、(14)詭弁（chala）、(15)誤難（jāti）、(16)負処（nigrahasthāna）であり、それらの真理を認識することによって至善（niḥśreyasa）に到達すると正理経に言う。[21]

そこで Pm. において論じられている内容と十六諦とを比較してみると、その排列は異るが、だいたいの一致を見出すことが出来る。ただ Pm. において「動機（prayojana）」と「定説（siddhānta）」とに相当すべきものが見出されないだけである。「所量（prameya）」は Pm. では「量の対境（pramāṇasya viṣaya）」[22]として論じられている。Pm. の内容を更に比較、吟味すれば、第一編、第一章、第二章には他の要素も含まれているけれども、知識論と言うことが出来る。第二章の最後の部分において論証の資料が論じられている。第二編、第一章の為他比量から五支の説明までは論証形式である。多少の前後はあるが、論議、論諍、論詰は論証過程である。似因、似比喩、論破、誤難、詭弁、負処は誤謬論であり、もって論理学の中心的問題は殆んど論じられている。

以上のように正理学派のカテゴリーを土台にして Pm. の内容を纏めて気付くことは、正理学派の根幹をなす十六諦に共通する問題が殆んど論じ尽されていることである。従って、その観点よりすれば、Pm. は一つの論理学書として論ずべき問題が網羅されている。しかしながら、ヘーマチャンドラは正理学派の十六諦に共通するような問題のみを論じ、それで満足していたとは思われない。Nyāyasūtra がそうであるように、第三、四、五編において問題を敷衍するであろう。更に、ヘーマチャンドラは他学派の論理学に通じているから、後編で何か新しいものを生み出し、ジャイナ論理学を発展させるに違いない。

Pm. には十五回にもわたり法称の論理書から引用がなされており、Pm. が法称の論理学から大なる影響を受けていることについて前に述べた。この点については別の機会に詳しく論究するであろうが、法称があって初めてヘーマチャンドラがジャイナ論理学の発展に貢献出来得たことは明らかである。しかしながら、ヘーマチャンドラ自身は法称の論理学から影響を受けているような態度を示さず、常に法称を批判の対象としている。それでは法称の論理学に対

する論駁が Pm. の中に網羅されているのであろうか。ここで想起されることは法称によってなされたジャイナ教批判に対してヘーマチャンドラは Pm. の中で答え、もしくは論駁しているであろうかということである。金倉博士が指摘せるように、㉓法称は Pramāṇavārttika 第一章、一八一頌より一八四頌㉔の四頌にわたり、アポーハ説によってジャイナ教義を論駁している。Pramāṇavārttika は Pm. において九回引用されていることは既に記したが、これほど何回も引用しながらヘーマチャンドラが前記のジャイナ教批判を見落したとは考えられない。しかもその論駁はジャイナ教義の根幹ともなるべき syādvāda に関したものであるからなおさらであろう。そこで考えられることは、ヘーマチャンドラは Pm. の現存しない後編においてその批判を取りあげ、論駁を返そうとしているのであろう、と言うことである。この点からしても現存の Pm. において論ずべき問題が全部尽くされていないことが証明される。後期になるに従って論理学書の内容が豊かに、しかも大部になる傾向があることをも考慮に入れれば、ヘーマチャンドラが五編に分ける大部の論理学書を書いたであろうことは頷かれる。

四

以上考察せる Pm. の構成及び内容を通して言えることは次の如くである。ヘーマチャンドラは、Nyāyabhāṣya とか Nyāyavārttika とかのように Pm. を五編、各編二章に分ける構成をもって書く企画、あるいは書いたと思われる。ところが現存するどのマニュスクリプトも第二編、第一章の途中で終り、完結されておらないことを示している。他の論理学書との比較、及び後期論理学書が含む内容の観点からして、現存の部分は重要問題を全部網羅しておらない。つまり彼が構想せるものの約三分の一しか現存していないことが、構成及び内容の両点から一致して言えることである。

そこで問題として考えられることは、(1)ヘーマチャンドラは構想通り五編よりなるこの論理書を完結したが、そのうちの約三分の一だけが後世に伝承され、約三分の二は喪失されたのであろうか、(2)種々の事情が彼を妨げ、構想通り書きあげることを断念し、未完の論理書のまま伝承されたのか、(3)この論理書は彼の絶筆であり、構想通り完成出来ず。未完の書を後に残して死んだのであろうか、ということである。

まず第一の問題であるが、若しヘーマチャンドラが構想通りの論理書を書いたとするならば、それは論理学のテキストとして弟子によって学習され、大切に伝承されたであろう。ヘーマチャンドラは単なる一介の学匠ではなかった。ヘーマチャンドラと Siddharāja 王との関係は、学問の面からも宗教的な面からも有名である。更に次の王 Kumārapāla に与えた彼の感化は非常に大きかった。彼の影響により、王は不殺生を宣布し、ジャイナ寺院を建立し、グジャラートを一時ジャイナ王国たらしめた、と伝えられている。このように二王との関係において名高く、しかもジャイナ教の哲学及び論理学に深く通暁せるヘーマチャンドラの著した Pm. が後世に完全な形で伝えられなかったとは考えられない。殊に、現存せる最初の三分の一から見て、優れたジャイナ論理学書であるし、論理学の入門書としても便利であるから、弟子達がその三分の二を喪失したとは思われない。更に、マニュスクリプトを比較的良く伝承している点では他に類のないジャイナ教徒が、十二世紀に書かれた重要な論理学書を完全な形で伝えないことはあろうか。

そこで第二の問題、すなわちヘーマチャンドラが種々の事情により完結することを断念したのか、ということが考えられる。何度も記したように、彼は天賦の文才に恵まれていたばかりではなく、正理、勝論、ミーマーンサー、ヴェーダーンタ、仏教の学問に通じていたから、少しくらいの事情に妨げられて完成出来なかったとは考えられない。更に、宮廷パンディットという高い身分にあった彼が未完の論理学書をそのまま弟子の手に渡すことはありえない。

最も妥当性を有するのは第三の問題、すなわちこの論理書は彼の絶筆であるということである。この書を執筆中、彼は突然病魔に襲われ、構想せる五編の論理書を完結しないまま死去したのであろう。そのように考えた場合、Pm. が信書による論議を提起しながら、それのスートラを掲げる前に止絶えている理由も頷ける。しかしながらそれを確実に証明する資料を他の論書に見出すことが出来ないことは遺憾である。唯一の手段は、Pm. の内容の中からその資料を探り出すことである。

Pm. I. I. 4 は第一スートラ "atha pramāṇamīmāṁsā" における 'atha'[25] の意味を解釈している。まず第一の解釈によれば、'atha' は開始 (adhikāra) を意味し、この論理書で取扱われる諸量の考察が着手されている。かくしてこの論理書の目標が示されることによって、好学の読者をしてこの書を学ばせようと勧めている。続いて第二の解釈が

次の如く述べられている。

「あるいは、'atha' の語は直後 (ānantarya) の意味である。文法 (śabda)、修辞学 (kāvya)、作詩法 (chanda) の解説の後に続いて量 (pramāṇa) が考察さるべきである、という意味である。これによって (=この意味に解するならば)、これ (論理書) は文法等の解説の作者と同一の作者のものであると言ったのである。」

この記述によれば、同一の作者 (ekakartṛ)、つまりヘーマチャンドラが文法、修辞学、作詩法に関する解説書を著し終って、これらに続いてこの論理書を今書こうとしていることを意味している。周知のように彼は詩人または学者として多才な学匠であったが、文法等の解説書とは直接的に彼の数多い著書のうちの何れを指すのであろうか。まず文法に関する書として、彼の Siddhahemaśabdānuśāsana が有名である。そのタイトルが示すように、この文法書は Siddharāja 王の希望と擁護によりて書かれたもので、これによって彼の名は不滅なるものとなっている。[26] 修辞学に属する解説書として Kāvyānuśāsana (or Dvyāśraya) 及び vṛtti (Alaṁkāracūḍāmaṇi) を彼が著した。これは Caulukya 王朝の諸王の生涯を歌いながら、修辞法を説いている。次に作詩法に関する解説書として、Chandonuśāsana 及び vṛtti がある。G. Bühler によれば、[27] Siddharāja 王が西暦一一四二年に死し、Kumārapāla 王の時代に入って間もなく Alaṁkāracūḍāmaṇi が書かれ、それに続いて、Chandonuśāsana が書かれたと推定している。この推定の根拠には種々の疑問があるが、前者の書に Kumārapāla 王の生涯も歌われているから、Kumārapāla 王治下に書かれたことは疑う余地がない。ヘーマチャンドラは西暦一〇八八年の生れであるから、Siddharāja 王が死去した時、彼は五十四歳であった。従ってそれらの書は五十四、五歳から六十四、五歳の間に書かれたといちおう仮定するならば、Pm. が執筆されたのはその後である。ヘーマチャンドラは八十三歳の長命を持ったと伝えられているが、何歳まで彼の学者としての活動が続いたか何も伝えられておらない。前述せる著書以外に、彼は伝記に関する著書を数多く書いている。それらは比較的晩年に書かれたらしく、例えば、Yogaśāstra とか Vītarāgastuti とかは彼が七十歳過ぎてから完成されたものらしい。[28] そのうち、後者すなわち Vītarāgastuti[29] は二十篇にのぼる讃歌の総称であり、その中に三十二偈より成る Ayogavyavacchedikā と Anyayogavyavacchedikā との二篇が有名である。ところが Pm. に Ayogavyavacchedikā からの引用が三回見出される。[30] この

ことは明らかに Pm. が Ayogavyavacchedikā より以後に書かれていることを物語っているから、Pm. が執筆されたのは彼が七十五、六歳の頃と仮定することが出来る。

ここで問題になる点が一つある。文法、修辞学、作詩法に関する解説書に続いて（anantara）Pm. が執筆されたとなっていることについて前に述べたが、修辞学、作詩法の解説書 Alaṅkāracūḍāmaṇi と Chandonuśāsana とは、Kumārapāla 王治下になるやいなや書かれたと G. Bühler が推定している。彼の推定の根拠は、それらの二書には、Court-Pandit が王に対してなすべき dedication や compliment が附されていないから、Kumārapāla 王の寵愛を未だ得ない初めの頃の作であろうということである。[31] この推定は必ずしも正しいとは言えない。なぜならば、Siddhahemaśabdānuśāsana の場合はそれは当然なされている。しかし他の場合もそうであると断定出来ない。彼の晩年の著書であることが疑うことが出来なくなった Pm. の場合でも王のことを一語も触れておらない。従って修辞学と作詩法の二書を必ずしも Kumārapāla 王と深い関係のなかった最初の頃の作と考えず、作詩法に関する Chandonuśāsana は少くとも七十二、三歳までに完成されたと考えることが出来ないであろうか。

以上の考察により、ヘーマチャンドラは作詩法に関する解説書の完成に続いて七十五、六歳頃から Pm. を執筆したことが明らかになった。それを執筆中彼は病魔にとりつかれ、彼が構想した五編から成る論理書の途中、すなわち第二編、第一章の途中で筆が止絶え、論ずべき多くの問題を残しながら、それをもって彼の絶筆となったのである。

註

① Bühler: Über das Leben des Jaina Mönches Hemacandra, (Wien 1889). Professor G. Bühler's The Life of Hemacandrācārya, translated from the original German by Prof. Dr. Manilal Patel, (Singhi Jaina Series No. II). 宇野惇氏「ジャイナ教の外教批判」序説（大倉山学院紀要、第一輯、一九五四）等において、ヘーマチャンドラの生涯について詳しく述べられているが、簡単に記せば次の如くである。

ヘーマチャンドラは現在の Ahmedābād の南西部に位置する小都市 Dhanduka にジャイナ教信者である商人の家に生れた。幼名を Cāṅgadeva（or Cāṅgodeva）と呼ぶ。幼少の頃、たまたまその地を訪れた有名なジャイナ僧 Devacandra の懇願によってジャイナ教団に入門した。入門後 Somadeva と改名し、Girnar 山の Neminātha 僧院にて研学した。文法、詩学、論理学等あらゆる学問に通暁し、ヘーマチャンドラと改名した。Siddharāja 王（Jaya-siṅha 1093～1142 A. D.）の勧めによって文法書を書きあげ、それは原作者と擁護者と

の名を冠して、Siddha-Hema-śabdānuśāsana と呼ばれている。この文典にはプラークリット及びアパブフランシャの部分も含まれ、派生語に関しては標準的著作とされ、彼の著作のうち最も有名である。彼は Siddharāja 王及びその後継者 Kumārapāla 王に対して大きな影響を与え、王をして不殺生を国中に宣布し、風俗をただし、ジャイナ教を広めたと伝えられている。彼の著書は数多く、上記の論文にそれらが詳しく紹介されている。

② Hemacandra's Pramāṇa-mīmāṃsā, translated with critical notes by Satkari Mookerjee, in collaboration with Nathmal Tatia, Bhārati Mahāvidyālaya Publications, Jaina Series No. 5, 1946, Intro. p. 6.

③ sūtra は経と訳されているが、この場合はむしろ摂頌とか摂偈の方が相応しい。

④ ヘーマチャンドラの自註が付された Pm. のマニュスクリプトは Peterson によって彼の Fifth Report on Sanskrit MSS. pp. 147～148 において最初に注目されている。ヒディションとしては、Arhatmata-prabhākara edition と Singhi Jaina Series (1939) とがあるが、後者を使用した。数ケ所ミスプリントが見出されるが、比較的立派な edition である。なお前に掲げた S. Mookerjee 博士の英訳は原文と逐語的には必ずしも一致しない。英訳されておらない部分とか誤訳も数ケ所見出されるが、意味が良く理解出来るように試みた力作である。

⑤ Pm. の自註では著者ヘーマチャンドラ自身のことを三人称で表現している。

⑥ Pm. I. 1. 110 (NB. 1. 4, NB. 1. 5, 6).

⑦ Pm. I. 2. 34. (HB. Ch. IV), Pm. II. 1. 17 (HB. Ch. 1).

⑧ Pm. II. 1. 93 (VN. p. 111), Pm. II. 1. 104 (VN. V. 1).

⑨ Pm. I. 1. 27 (PV. II. 1), Pm. I. 1. 93 (PV. III. 247), Pm. I. 1. 94 (PV. III. 305), Pm. I. 1. 123 (PV. I. 215), Pm. I. 2. 42 (PV. I. 11), Pm. I. 2. 44 (PV. I. 35), Pm. I. 2. 45 (PV. I. 37), Pm. I. 2. 65 (PV. I. 192～3), Pm. II. 1. 20 (PV. I. 28).

⑩ Pm. における法称の論理学書からの引用及び彼の与えた影響について別の機会に発表する予定である。

⑪ 宇野惇氏、「ジャイナ教のスャードヴァーダ」（インド学試論集 Nos. 6～7）一〇七頁参照。

⑫ Pm. I. 1. 53 (Laghīyastrayī II. 1), Pm. I. 2. 11 (L. III. 12); Pm. I. 1. 55 (Siddhiviniścaya p. 413 A), Pm. I. 1. 56 (S. p. 413 A).

⑬ 大地原豊助教授、「インド土着文法学における比喩的論証」——Mahābhāṣya I. 1. 56 の事例——（関西大学東西学術研究所論叢四十七）一頁。
Louis Renou : Histoire de la langue sanskrite p. 55 以下にストーラについて詳しく説明されている。

⑭ Nyāyavārttika p. 1. この箇所を Vācaspatimiśra は注釈している (Nyāyavārttikatātparyaṭīka P. 6, Kashi-Sanskrit-Series 24)。

⑮ Pm. I. 1. 107 (Nyāyasūtra I. 1. 4), Pm. II. 1. 17 (NS. V. 2. 15), Pm. II. 1. 22 (NS. I. 1. 32), Pm. II. 1. 69 (NS. V. 2. 50), Pm. II. 1. 69 (NS. I. 2. 1), Pm. II. 1.

70 (NS. I. 2. 3), Pm. II. 1. 76 (NS. I. 2. 19), Pm. II. 1. 80 (NS. V. 2. 2), Pm. II. 1. 82 (NS. V. 2. 4), Pm. II. 1. 93 (NS. I. 1. 39), Pm, II. 1. 97 (NS. V. 2. 19), Pm. II. 1. 100 (NS. V. 2. 22), Pm. II. 1. 101 (NS. V. 2. 23), Pm. II. 1. 102 (NS. V. 2. 24), Pm. II. 1. 109 (NS. I. 1. 32), Pm. II. 1. 109 (NS. V. 2. 12).

⑯ Pm. I. 2. 55 (Nyāyabhāṣya I. 1. 1), Pm. II. 1.80 (NBh. V. 2. 2).

⑰ Pm. II. 1. 80 (Nyāyavārttika V. 2. 2).

⑱ Pm. II. 1. 110.

⑲ 四要素 (caturaṅga) とは論議 (vāda) の factors であり、Judge, President, Proponent, Opponent の四者である。(Pm. II. 1. 68).

⑳ 宮坂宥勝著「ニヤーヤ・バーシュヤの論理学——印度古典論理学——」四一六頁参照。

㉑ Nyāyasūtra I. 1. 1. Jayanta-bhaṭṭa の Nyāyamañjarī は十六諦の順序に従って正理経を解説したものであり、Keśavamiśra の Tarkabhāṣā も十六諦の順序に従って叙述されている。

㉒ Pm. I. 1. 117.

㉓ 金倉円照博士著「印度精神文化の研究」三九二頁—三九五頁参照。

㉔ 金倉博士の前掲書では、一八二B～一八六Aとなっているが、今は Gnoli 本による頌の数え方に従った。

㉕ atha は「さて」の意味である。

㉖ 宇野惇氏「ジャイナ教の外教批判」序説——ヘーマチャンドラの一作品を中心として——（大倉山学院紀要 第一輯 五七頁）参照。

㉗ English tr. 'Life of Hemacandrācārya' p. 36.

㉘ Ibid., p. 39.

㉙ G. Bühler は、前掲書四十九頁において、この書に対する Malliṣena の注釈書 (Syādvāda-marjarī) を Pm. と間違っている。

㉚ Pm. I. 1. 57 (A. V. 21), Pm. I. 1. 58 (A. V. 25), Pm. I. 1. 58 (A. V. 31).

㉛ Ibid., p. 36.